

# と 経営 健康

第5回

## 生き残りへ 智略縦横 真田三代

講談師 一龍斎貞花

「小よく大を制す、真田の戦いは、わたしら弱小企業も、智恵を出して生き残らなきゃいけませんね」そんなお声を頂きました。わたしども講談も同様なんです。そうしたことから大河ドラマの講談化は勿論ですが、「台湾に東洋一のダムを造った八田與一」「日本ロータリークラブ創立者米山梅吉物語」など、私の生き残り策です。

慶長五年九月一日、三万二千を率いて家康は江戸を出発、箱根を越えて西へ。嫡男秀忠率いる三万八千の軍勢は東山道を経由して本隊と合流するべく上州路へ。軍監本多正信以下、榊原康政、平八郎の子本多忠政、奥平忠昌、大久保忠隣、仙石秀久、牧野康成、森忠政ら徳川勇将揃い。

「錚錚たる顔ぶれじゃな、信幸は上田の手前で合流するのか、東西の戦いに敵の兵力を減らすに限る。そのためには秀忠の軍勢を信州に釘付けにすればよい、敵の総大将は信幸にあらず、初陣二十二歳の秀忠よ、老臣たちにおのが力を見せようと気が早まっておろう、面白い戦いが出来そうぞ」

敵に廻った信幸に手の内を知り尽くされていると、心配する家来たちに心配させないよう話す昌幸。  
リーダーの大切な対応です。小を動かすためにいつも部下の不安を取り除いています。

信濃に入った秀忠は

「西軍についた方がいいが、三万八千の我軍に恐れをなしておろう、奴は利のある方へなびく、不利と見れば城明け

渡すに違いない」

降参をうながす使者を、

「お手向いをするは本意ではござらん、降伏の条件を話し合いとうござる、しかるべきお方をお遣わし願いたい」

国分寺において使者本多忠政に倅信幸。忠政勢い込んで

「城明け渡しの申入れ、ご本心でございますか」

「無論本心じゃ、大軍を相手に戦えるものでない、誓ってよい」

大軍を送り込まれるは承知のはず、今になって怖気づくのはおかしい、なにか企みがあるのではないかと、信幸父の心が読めません。

「城明け渡す代わりに、家来の命ことごとく助け、そして本領を安堵して頂きたい」

「されば、小諸城へ立ち戻り秀忠様にお伝えします、追ってご沙汰あるまでお待ちあるよう」

「本多殿にお世話をかけます」  
しおらしく頭を下げる昌幸。

「城明け渡すなら、それで構わぬ」

秀忠了承、ところが明け渡すといながら一向に明け渡さない、催促すると「城中を整理し、掃き清めますので今少しお待ち願いたい」

もっともらしい理由をつけて、相変わらず引き延ばす。秀忠あせってきた。

「城明け渡しは真つ赤ないつわり、時間稼ぎをしているに違いありません」

「おのれ、昌幸め、許せん」

九月五日の朝、徳川軍は神川を押し渡り上田城へと進撃。

「信幸、そちは幸村の守る砥石城を攻

め落とせ」

「ハッ。よいか幸村は忍びの者を数多く使っておる、いかに攪乱かくらんするかわからん、気を許してはならんぞ」

「申し上げます、砥石城はもぬけの殻、夜陰に乗じて城を出たものと思われます。人と見せかけた藁人形ばかりにございます」 家来の報告に秀忠、

「ウム、緒戦の勝利幸先良し。上田攻めに全軍の士気が高まるぞ」

「これは畏かもしれません、総攻めは今暫く様子を確かめた上では」

「なにを申す。主戦場は西じゃ、一気に攻め落とし一刻も早く西へ向い、本隊と合流することぞ」

重臣榊原康政の言葉に、秀忠も

「わしも康政の意見に賛成じゃ」 上田城攻めと決定。

徳川が攻めると真田はどつと逃げる。勢い込んで突進すると横合いから伏勢、先陣の苦戦に主力部隊が駆け付けると、真田の兵は逃げ込み、一息つくくと大手門を開いて真一文字に攻め掛かる。態勢を立て直すと横合いから激しい銃声。

たまりかね神川へ退却すると、浅瀬が激流、前の戦いと同じで、堰き止めておいた上流の水を一気に流したもので、若い秀忠は、

「敗地にまみれたままで、どの面下つらげて父上にお会い出来ようぞ」

「恐れながら上田にこだわるは上策ならず、上田にばかりあつていては、父の術中に陥るばかりです」

「信幸殿の申される通り、関ヶ原に遅れるようなことになれば、それこそ大失態、打ち捨てて参りましょう」と、本多正信が賛成。

### 関ヶ原合戦、一日で東軍勝利

慶長五年九月十五日、関ヶ原合戦の火ぶたが切つて落とされました。西軍八万二千に対し東軍八万九千、これに秀忠の三万八千が加われば東軍が圧倒的に有利になるのだが、秀忠結局間に合わず、戦いは一進一退を続けていたが、小早川秀秋の裏切りによって、大戦おおくさはわずか一日で東軍の勝利。家康は、遅れた秀忠に怒り心頭、対面を許しません。

大谷刑部討ち死に。石田三成、小西行長、安国寺恵瓊えけいら打ち首。毛利輝元を百二十八万五千石からわずか三十六万石に大減封。この恨みが幕末に長州が、徳川幕府を追い詰めた一因ともいわれます。上杉も百二十万石から米沢三十万石に減らされ、直江兼統は悔しさを押し隠し、自分の息子に跡を継がせず、本多正信の息子を養子にして跡を継がせ、家の安泰を図ります。

大河ドラマでは、上杉景勝は雄弁、幸村にも好意的で兼統は陰湿に描かれているが、歴史書は全く逆。以前の大河ドラマ愛の兜をかぶった兼統とは正反対。立場が変われば正反対もあるが、ここは上杉の物語りでなし、兼統を名家老にしてほしいと思いますが如何。企業でも、部下に対し正反対の指示を出せば信を失います。そんな時は納得させる説明が必要です。

昌幸、幸村親子に対して家康は厳罰を考えます。なにしろ金をだして援助してやった上田の城に、二度もこつびどくやられたんですから無理もない。

小松姫は、夫信幸に

「父上と幸村様の処罰が減じられますようご嘆願下さいませ、父忠勝にも頼みます」 素晴らしい嫁さんです。

敵対したとはいえ、父と弟の命を救いたい信幸と、本多忠勝の懇願に流石の家康も折れ、死罪、軽くても八丈島へ流罪と考えていたが、高野山送りと決定。宇喜多秀家が八丈流罪の第一号。

離れ島と違って大阪と地続き。真田家は高野山蓮華定院の檀那でしたから全く縁の無い所でなく、ただ高野山は女人禁制のため、幸村の妻お竹と娘たちさんないが山内に入れない、そこで監視役の和歌山城主浅野幸長よしながを通じて、徳川家に願ひ出て高野山の麓九度山くどやまにて塾居。茅葺きの隙間風が吹き込む粗末な庵いおり。しかし幸村は、望月六郎を影武者にして、佐助や笥十蔵、根津甚八らと共に、大阪へ出沒して自らの目で確かめる、実に大胆です。九度山での流人生活十四年間。大阪の陣にて真田丸を築き、家康の心胆を寒からしめる、日本一の兵つわものの活躍は、いよいよ次号最終回。お楽しみ。ポポンポン